

聖書：創世記 27：30～28：9

説教題：激しく身震いして

日時：2024年1月21日（朝拝）

前回、27章の前半でリベカとヤコブがイサクを欺き、イサクがエサウに与えようと思っていた祝福を横取りした記事を読みました。神はエサウとヤコブの誕生前に「兄が弟に仕える」と母リベカに語り、弟ヤコブが神の契約を担う者となるという御心を示されました。イサクもこの御心を知っていたと思いますが、彼は兄のエサウを愛し、彼に神の契約と祝福をひそかに受け継がせようとしてしました。これを知った母リベカが画策して、弟ヤコブにその祝福が行くように主導した様子が前回の箇所に記載されました。イサクは年老いて目がかすんでいたために区別がつかず、エサウだと思ってヤコブを祝福しました。その祝福が終わった場面から今日の箇所は始まります。

ヤコブがこの場所を出ると、入れ替わるようにして兄のエサウが入って来ました。彼は父に言われた通り、獲物をしとめて、それを美味しく猟師し、父のところへ持って来て言いました。「お父さん。起きて、息子の獲物を召し上がってください。あなた自ら、私を祝福してくださるために。」ここで二人は直前に何が起こっていたのかを知る事となります。二人はどのようにこれに反応したのでしょうか。まず兄息子エサウの姿から見て行きます。

彼は弟ヤコブが祝福を受け取ったと知ると、34節で「声の限りに激しく泣き叫びました。そして父に言います。「お父さん、私を祝福してください。私も。」イサクが「おまえの弟がおまえへの祝福を奪い取ってしまった」と言うと、36節で「私のためには、祝福を取っておかれなかったのですか」と言い、さらに38節で「お父さん、祝福は一つしかないのですか。お父さん、私を祝福してください。私も。」と言い、声を上げて泣いたとあります。聖書に見られる最も悲痛な叫び声の一つでしょう。しかし私たちが思うことは、これは自業自得であるということです。彼は25章後半で自ら長子の権利を売りました。そんな良く分からない祝福より、一杯のスープの方が私には価値があると言って、神の契約を担う特権を軽んじました。その彼が言った通りのことが起こっただけではないのでしょうか。なのに今になって「欲しい！欲しい！」と泣き叫ぶのは矛盾していないのでしょうか。

ある人は思うかもしれませんが。確かに以前、エサウはそうに言った。しかしそういう誤りは誰にでもあるのではないか。こんなにも泣いている彼に憐れみが与えられることはないものだろうか。確かに私たちはエサウを見て同情したくもなります。しかし泣けば良いというわけではありません。悲しみには二つの種類があります。一つは自分自身の罪を思って嘆き悲しむことです。もう一つは罪そのものではなく罪の結果だけを悲しむことです。このエサウはどっちでしょうか。彼の悲しみは後者です。受けられると思っていた祝福が受けられなくなって泣き叫んでいるだけです。本来彼は自分が犯した過ちを思い起こして自分自身を断罪すべきでした。そのことをまず反省すべきでした。しかし彼はそのようにはしていません。むしろ彼は他人に責任転嫁し、他人を責めています。36節で彼は「あいつの名がヤコブというのも、このためか。二度までも私を押しつけて。私の長子の権利を奪い取り、今また、私への祝福を奪い取った。」と言っています。彼はまるで自分が被害者であるかのような言い方をしていますが、これは彼自身が選んだ道だったのではないのでしょうか。

さらに彼は怒りをため込んでヤコブを殺そうと考え始めます。先の責任転嫁は墮落後のアダムを思い起こさせますが、兄弟を殺そうとする姿は誰を思い起こさせるのでしょうか。それはアベルを殺したカインです。あのカインも自分の悪を反省せず、祝福を受けた弟を妬み、殺すという道へ進みました。エサウもそっくりです。このように悔い改めず、神に祝福された者を攻撃し、滅ぼそうとする姿は彼が創世記 3 章 15 節で言われている「蛇の子孫」に属する者であることを伺わせます。

エサウの性質が分かるもう一つのエピソードが今日最後に読んだ 28 章 6～9 節にあります。彼はそこでカナン人から妻を迎えたことが父イサクに気に入られていないことを知ります。弟ヤコブはカナン人から妻を迎えないように、母リベカの出身地パダン・アラムへ送り出されました。そこでエサウはどうしたでしょう。何と彼はイシュマエルのところに行き、そこからもう一人の妻を迎えました。ここにもエサウが霊的に無感覚な人であることが描かれています。これはカナン人でない人が妻にいれば良いという問題ではありません。カナン人でない人をもう一人、妻として加えればいくらか改善するというような話ではありません。ここにエサウは本質的な問題をさっぱり理解していない人であることが露呈されています。

さて今日の箇所にはリベカについても少し記されていますので、イサクについて見

る前に彼女について先に簡単に見たいと思います。彼女はエサウが弟ヤコブを殺そうと考えていることを知りました。そこで彼女はヤコブを自分の出身地、遠いハランに逃がそうとします。彼女は43節以降でこう言います。「さあ今、子よ、私の言うことをよく聞きなさい。すぐに立って、ハランへ、私の兄ラバンのところへ逃げなさい。兄さんの憤りが収まるまで、おじラバンのところにしばらくとどまっていなさい。兄さんの怒りが収まって、あなたが兄さんにしたことを兄さんが忘れたとき、私は人を送って、あなたをそこから呼び戻しましょう。」リベカとしては、これは短期間のことと考えていたようです。エサウは今怒っているが、時間が経てば怒りも収まり、やがて忘れるだろう。その時が来ればあなたを呼び戻すと彼女は言います。そしてイサクに働きかけます。ところが46節を見ると、彼女は今のことを直接は言っていません。彼女が言っていることは、ヤコブをこの地に置いたままにしているとヤコブもヒッタイト人、すなわちカナン人の中から妻を迎えるかもしれない。そうなったら私は生きているのが益々嫌になるということです。多くの学者はここにも策略家リベカの姿を見ます。この章の出来事はある意味でリベカが主導しました。彼女がヤコブに働きかけ、ヤコブが祝福を取り、その結果、エサウがヤコブを殺そうとしています。しかしリベカはそのことには一切触れません。陰で色々操った自分が前面に出ることがないようにし、ヤコブがカナン人から妻をめとったら困るという点を前面に出しています。確かにエサウがカナン人から妻を迎えたために、イサク家には悩みが生じるようになったことが26章の最後に書いてありました。彼女はそのことに訴えてヤコブがこの地を離れるように、良い妻を探すという名目でこの地を離れることができるようにイサクに働きかけたということです。確かにそうかもしれません。こうしてリベカの策略は今回もうまく行きます。

しかしそのリベカも報いを受けることとなります。彼女はイサクが兄エサウを愛しているのと対照的に弟ヤコブを愛していました。家の近くで、いつも自分のそばにいる穏やかな彼が好みでした。その彼がここを去るのはしばらくの間だけだと思っていました。しかしこの後の記録を見ると分かる通り、ヤコブはラバンのもとで20年間も過ごすこととなります。そしてこの地に戻って来た時、母リベカに会ったという形跡はありません。ほとんどすべての注解者が述べているようにリベカはこうしてヤコブとここで生き別れになったのです。愛する息子を再び見ることはできなかったのです。その日を待ち望みつつ、そのことがついにやって来ない日々を過ごす中で、彼女は自分がしたことについて考えさせられる日々を送ったのではないのでしょうか。彼女

はこうして自分のしたことの報いを、この先何年もかけて受け取ることとなったのです。

最後にイサクはどうだったのでしょうか。彼はエサウが入れ替わりに入って来て、それがエサウとだと知った時、33 節で「激しく身震い」しました。これは単にヤコブに欺かれたことを知ってショックを受けたという程度のことではないと思います。もしそうなら兄息子エサウをえこひいきして来たイサクのこと、彼をどういう形かで祝福してもおかしくないと思います。あるいはどうやってヤコブに対抗するか、エサウと一緒に策を練ってもおかしくないと思います。しかしこの後のイサクの態度はそれまでと丸っきり違っています。彼は身震いした後、33 節でヤコブを指して「彼は必ず祝福されるだろう」と宣言します。また 40 節では「おまえは自分の弟に仕えることになる」と確言します。これらのことからすると、33 節の激しい身震いは単なるショックではなく、神の御前における非常な恐れと関係するものだったと考えられます。イサクは主の御心を知りながらも、自分の人間的な思いによってエサウを祝福しようとしていました。それが主によってひっくり返されたことを知ったのです。神の主権によって自分の罪が暴かれたことを悟り、恐れ震えたのです。その時に彼は自分の非を瞬時に認め、悔い改めをもって神の御心に沿う歩みへ自分を従わせたのです。ですから彼はエサウの度重なる懇願にもかかわらず宣言を変えませんでした。エサウからすれば突然イサクは冷たくなったように思ったかもしれません。しかしイサクは肉の思いを断ち切って、ひたすら主の御心に従う歩みへと自分をささげたのです。さらけ出された罪を恥じつつ、自らの誤りを認め、神の憐みにすがって再出発している人の姿を私たちはここに見るべきではないでしょうか。

そのような人として 28 章 1～5 節でイサクはヤコブを祝福して送り出します。自分がかつてそう導かれたように正しい結婚をするように命じます。そしてアブラハムの祝福を祈り、ヤコブを神の契約の継承者として正式に認めます。こうしてアブラハムからイサクへと受け継がれた神の契約は、その子ヤコブに継承されたことがここに記されているのです。

私たちが今日の箇所に見るのは何でしょうか。それはこのようなある意味でメチャクチャな家であったのに、神の救いの契約は受け継がれ、継承されて行ったということです。この 27 章を読む時、きっと多くの人はどうしてこれが神の救いの約束を担

う家だろうかと思うのではないかと思います。全世界を祝福する神の働きがどうしてこんな家から始まり得るだろうか。神の救いの計画もこんな家では立ち消えになるのではないかと。しかし今日の箇所最後の部分では、神の御心の通り、ヤコブに神の契約が継承されました。そのヤコブはこれから追放されます。果たしてこの後がきちんと続くのかと心配されますが、神はこの後も守ってくださり、ヤコブは信仰の道を歩み、やがてこの地へ戻って来ます。そしてさらにその子どもたちに救いの約束は継承されて行きます。ここに聖書が語る驚くべき福音があります。彼らが選ばれたのは彼らが立派だったからではありません。他よりも優れた家族だったからではありません。むしろイサクの家は崩壊寸前の家でした。ただ神の恵みだけが救いの約束を保ち、存続させたのです。そしてこの後も同様に導くのです。

ですから私たちは自分の家族を見て、あるいは自分自身を見て、これでは神の救いにあずかることはできないと思うことがないようにしたいと思います。こんなイサクとヤコブの家が神の祝福を担い運ぶ家として選ばれ、また用いられて行きました。ですからどんなに壊れたような状態にある家でも、この神の祝福にあずかることができます。ただ一方的な恵みによって救ってくださる神を仰いで、その御言葉に聞き、導かれたいと思います。またすでに救いにあずかっている者たちも、自分たちが優れているから救いにあずかったと思いを違えることがないようにしたいと思います。この箇所と同じく、私たちもただ神の恵みによって生かされている者たちです。そのことを思っべてすべての栄光と賛美をただ神に帰し、神を礼拝する者へ導かれたいと思います。

そしてもう一つ心に留めたいことは、この神の恵みによる救いにあずかるために私たちに求められることは悔い改めであるということです。私たちは二代目イサクが正しい道から外れていたことを知ってショックを受けるかもしれません。この創世記 27 章には晩年のイサクになお肉の思いで歩む面があったことが露呈されていました。しかしある意味でそれ以上に私たちが目を留めるべきは、自分の罪が明らかになった時、彼は激しく身震いし、神の前で恐れたことです。そして心を頑なにせず、瞬時に自らの罪を認めて、主に従う歩みへと軌道修正したことです。そしてアブラハムから受け継いだ大事な神の契約をヤコブに譲り渡し、そこに約束されている神の救いに信頼しました。このアブラハムからイサクへ、イサクからヤコブへと継承された神の契約の中心にあるのは、神がやがて与える一人の救い主によって、より頼む民を救うという

ものです。それは将来のイエス・キリストによる救いを指し示すものです。イサクは自分の罪を認めて悔い改め、神の憐みによりすがり、神がくださる救い主による救いを待ち望み、そうして救いを得ました。私たちも激しく揺さぶられる時があるかもしれませんが、自分の罪が示されてハッとする時、衝撃を受ける時があるかもしれません。その時、イサクのように行動する者でありたいと思います。理屈をつけて自分を正当化し、それまでと同じ生活続ける者ではなく、主の前で恐れ、主に調べていただき、主の憐みにすがる者でありたいと思います。イサクは決して完全な人ではありませんでしたが、神に罪を示された時、心を頑なにせず、神の御前で恐れ、正しい歩みに立ち返りました。そして神が約束くださった救いにより頼み、救いを受けました。聖書が示す救いはこのようなイエス・キリストによる救いです。そのことを今日の箇所も私たちに示してくれているのです。